

中越大震災

春日 勇輝

二〇〇四年十月二十三日、ぼくはひいお
 ばあちゃんのおみまいで病院にいました。階
 段をのぼろうとしたしゅんかん、激しいゆれ
 が病院をおそいました。ぼくたちは立つこと
 さえも出来ませんでした。その時はまだ「何
 た、ただの地震が。」としか思っていました。
 でしたが、それがあの中越大震災でした。

ぼく達は、ゆれがおさまった時をみはから
 けて、自宅へと急いで向かいました。自宅へ
 と続く山道は、こんな所を通ったことある
 っけ？と思うほど、周りの風景が変わって
 いました。木が何十本もおれ道も土砂くず
 れでふさがれていました。仕方なく、ちがう
 山道から家に向かっていた。ぼくたちの車
 の目の前に、勢いよく木がたおれてきました。
 あと一秒ちがっていれば死ぬところでした。
 ぼく達は車を置き、わずかなすきまから歩い
 て自宅へと帰りました。近所の人はいんな外

に出て集まっていた。周りを見るとほと
んどの家が半がいしっていて、住めるような状
態ではありませんでした。道路も異様な形を
していました。
夜は、道の真ん中にテントを立て、みんな
でかたま。てねました。外はここえるような
寒さで大きな余震も絶えませんでした。多く
の人達が余震が起こる度に悲鳴をあげました。
ぼくは心の中で何回も「死にたくない。〜と
思いました。

次の日、ぼくの住む樽沢集落にひな人指示
が出されました。いつ余震が起こるかわから
ない中、必死に必要な物を取りに行きました。
樽沢の人達は、「ふれあいスポーツセンター」
という所にしばらく大勢で暮らさなければな
りませんでした。そこは広い所なので、スト
ーブをつけてもなかなか温まりませんでした。
特に夜は体がおるようには寒かったです。
かも、毎日お弁当でした。家での食事が恋し
くなりました。

しかし、悪いことばかりではありませんでした。週に何回か他の地域から様々な支援が届きました。ぼくたちを元気づけるために、合奏をしたりまんざいせしたりしてくれた人もいました。たくさんの人達がぼくたちに勇気と希望を与えてくれました。

地震から一年が過ぎ、ぼくは自宅にまで普段通りの生活を送っています。やっぱり家は広くてあつたかくて何を食べても美味しく感じられます。前と比べれば夢のようです。

ぼくがこの災害を通して学んだことは、人間というのはたとえ見知らぬ人同士でも支え合って生きていくことが大切なんだということです。ぼくはこの災害でいろいろな人と知り合うことが出来ました。どの人も優しく、心の温かい人達ばかりでした。でも、あの中越地震は、多分一生ぼくの心の傷となり、忘れられることは出来ないと思います。だから、これから先、もうあんなことは絶対に起きないようになっています。